

若者はなぜ政治から離れていくのか

横澤樹・萱野史菜

開票速度が世界一の国、日本。ちいさく折りたたんだ投票用紙を箱に入れると、紙は箱の中でゆっくりと開く。形状記憶用紙なのだ。その世界一の技術とは裏腹に現在、政治に関心をよせる若者が圧倒的に少ない。平成 24 年の衆議院選挙では若者の投票率は 37.89% と、他年代と比べても圧倒的に低い。

「若者は自分が政治と関係しているという意識が薄い。」そう訴えるのは、学生団体 ivote の副代表である、学習院大学 2 年桑原稜氏だ。学生団体 ivote は 2008 年に設立され、若者の政治意識を高めようという理念の下活動している。所属するのは都内の大学生が中心。メンバーははじめから政治に興味を持っている人ばかりとは限らない。

ivote の看板イベントは「居酒屋 ivote」だ。政治家の腹黒い、ネガティブなイメージを払しょくし、政治家を身近に感じてほしいという思いから生まれたイベントだ。内容としては、複数の議員と学生を居酒屋へ招き、酒とともにざっくばらんに語ろうというもの。話す内容は政治の話にとどまらず、アイドルやスポーツの話など多岐にわたる。「次は絶対投票に行きます」という参加者の声のとおり、後日実際に話した議員をテレビでみると、余計身近に政治を感じるそうだ。桑原氏は政治談議ではなく、アットホームな雰囲気であることがこのイベントの魅力であると話す。

他方、政治意識を専門に研究している、慶應義塾大学法学部の河野武司教授は、若者の政治離れが進んでしまっているのは、政治を変えなくてはならないという切実さが今の若者にはないからだを指摘する。2014 年の 9 月から 12 月にかけて、香港で学生を中心とした愛国教育をめぐる大規模な反政府デモが起こった。しかし、日本では香港のように若者の暮らしを急変させるような差し迫った問題はない。「若者は政治なしで生きていける状況にある。」と河野氏は言う。「若者の尻をいくら叩いたって、政治への関心を高めるのは難しい。」ではどうしたらよいのか。河野教授は例えば義務投票制の導入が有効ではないかと考えている。1924 年の採用以来、オーストラリアでは、95%を超える高い投票率を維持している。

ivote の活動を通して上げられる投票率は 0.1%にも満たないかもしれない。しかし彼らのように草の根レベルで若者の政治的関心を喚起し、一人ひとりの政治意識が変わっていくことは、とても意義深い。ivote の活動とは別に議員のインターンシップをしている桑原氏は国会議員に言われたこの言葉が心に残っている。「無関心であっても無関係でいられないのが政治なのだ」

編集後記

政治に対して無関心でいれても、政治と無関係では決してられない。例えば奨学金制度や選挙年齢の引き下げなどをめぐる議論が我々若者に直結する身近な政治的議題として挙げられるだろう。そのような身近な議題について日頃から自分のこととして考えるくせをつけることが重要だと感じた。ivoteのような草の根運動がより波及し、さらに意義のあるものになるかどうかは、我々若者の意識次第であろう。

横澤樹

本記事テーマは私が長い間書きたく思っていたものだ。記事を書く以前、政治に対する関心が低いことの一番の要因は選挙制度だと思っていた。しかしながら、取材を通して、最大の要因は私たちのような若い人々にとって生活を激変させるような問題がないということだと感じるようになった。一聞、このことは良いことのように思えるが、今日の若者が社会を担う時代への不安を隠しきれない。その際、彼ら、私たちは、不慣れな政治と向き合っていけるのだろうか。

萱野史菜